

## 第48回 日本PTA 関東ブロック大会で感じた伝統文化継承の重要性について

富士市PTA 連絡協議会 副会長 清 淳也

第48回 日本PTA 関東ブロック研究大会茨城大会が平成28年10月21日(金)22日(土)に開催され、齋藤会長はじめ6名のメンバーで行ってまいりました。

第一日目、21日の金曜日には分科会が各都市で行われました。今年の分科会は「自然」「古(いにしえ)」「結(むすぶ)」「愛」「地域のたから」「未来」「世界」の8テーマから構成されていました。

私は東海村の東海文化センターにて行われた第2分会(伝統文化)に出席してまいりました。ここでのテーマは、「古(いにしえ)」からのメッセージ～世代を超えて子どもに守り伝えるもの～というものでした。まずはじめに茨城県常陸太田市立金砂郷小学校による金砂田楽舞をみました。

この田楽舞は「天下泰平」「五穀豊穰」の願いを込めて地域の人々に受け継がれてきた踊りだそうです。歴史は古く、大祭は851年に1回目が始まり73年ごとに行われるもので、最近では平成15年に第17回目が行われたそうです。73年に1回しか行われないうことは一生に1回しか経験できないものなのかと驚くとともに、歴史、伝統の重みと悠久とした時間の流れとまさに「いにしえ」の先祖の方々とのつながりを感じました。

金砂郷小学校では、総合的な学習の時間に3年生から6年生が、地域に残る体験活動をしているそうで、地域の伝統芸をしっかりと引き継いでいることに、地域の方々がこの田楽舞をとても大切にしていることを感じるとともに、日本は伝統風俗が各地域に存在して、日本人としての心を大切に守り続けている国民であることに誇りを感じました。

次に茨城県日立市立十王中学校による十王鶉舞をみました。日立市十王町は、かつて常磐炭坑の町として栄えたとともに、全国唯一の鶉の捕獲地である伊師浜海岸や、八幡太郎義家伝説や名勝堅破山(たづわれさん)など、自然や歴史に特色を持つ町です。この地域の特色を取り入れて、「十王鶉舞」という新たな郷土芸能を地域と共に共有し、育て、地域に貢献しようとするを目的としたものだそうです。

強度に百年経送されるような伝統芸能を創作しようとする学社連携型の意欲的な日本文化理解教育として、生徒さんの自主的な創作活動が、その共有化と継承を通じて地域の活性化に生かされていることが伝わってきました。

最後に講談師・ナレーター・声優・常陸太田大使の一龍齋貞弥さんによる「豊後国の二孝女物語(ぶんごのくにのくにこうじょものがたり)」を聴いてまいりました。落語と違い、講談は登場人物は実存した実際の物語を語っていくものです。

豊後国の二孝女物語は、江戸時代後期に、親鸞ゆかりの地の巡礼の途上で病に倒れた父親を連れ戻すために、豊後国臼杵(うすき)藩(現大分県臼杵市)から常陸国水戸藩(現茨城県常陸太田市)の青蓮寺までの旅をした姉妹の物語です。

このお話が実話か否か定かではなかったそうですが、2004年に臼杵市の郷土史研究家が青蓮寺の紹介したことをきっかけに、翌2005年に青蓮寺で臼杵藩江戸屋敷から青蓮寺宛の手紙や姉妹からの礼状等の17通の書簡が発見され、実話であることが判明されたそうです。江戸時代の物語が最近の資料により事実だと裏付けされたこと、今まで講談や盆踊りの口説き等で伝わってきたことに、日本人の文化伝統の承継能力や道徳観の共有能力の高さに感心しました。

2日目は富士市や静岡県のパタの役員の皆様と全大会に参加させていただきました。1日目に日本の传统文化の継承について学習させていただきました私にとって、全大会においてもアクションとして催された茨城県常陸大宮市立大宮北小学校による子ども歌舞伎について、非常に関心をもちました。4年生の総合的な学習として「地域・歴史・伝統」というテーマで学習し、伝承しているとのことでした。

4年生全員が途中でつまづくことはありながら精一杯演じている様子を見て、伝統芸能が地域や教育に貢献することの重要性を感じるとともに、子供から伝わる力に感動しました。

富士市においても学校教育を通じて传统文化継承の重要性を伝えていければより豊かな郷土愛や地元貢献の意識が芽生えるのではないかと思います。

传统文化ということで、みなさんに見ていただきたいと思いますので、以下写真を添付させていただきます。

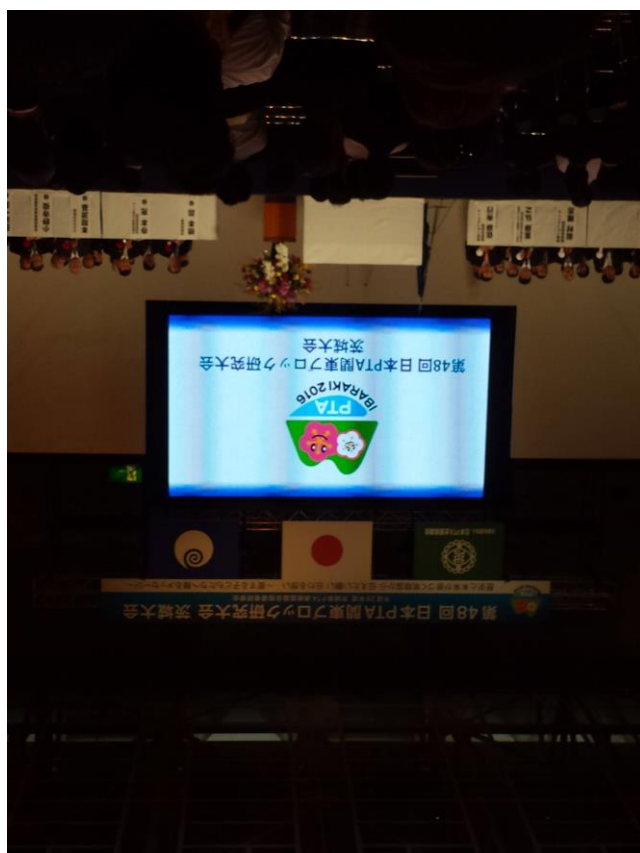
茨城県日立市立十王中学校による十王鶉鳥舞



一龍齋貞弥さんによる「豊後国の二孝女物語(ぶんごのくにのにこうじょものがたり)」



全大会



常陸大宮市立大宮北小学校による子ども歌舞伎

